

法華経は 総ての人のため

布教部長 村松潮隆

絵 藤田由也

此等の文の心は四十余年の程、若干の説法を聴聞せしかども、法華経のやうなる法をばすべ
てきかず、又仏もついに説かせ給はずと法華経をほめたる文なり。四十二年のき、(聴)と今
経のき、とをば、わけ(分)たくらぶ(比)べからず。

それを法華経得道の人のためにして、爾前得道の者のためには無用なりと云ふ事大なる誤なり。
をのずから四十二年の経の内には、一機一縁のためにしつらう(造)ところの方便なれば、設
ひ有縁無縁の沙汰はありとも、法華経は爾前の経経の座にして得益しつる機どもを押しさね
(聚束)て一純に調べて説き給ひし間、有縁無縁の沙汰あるべからざるなり。悲しい哉、大小、
権実みだりがはしく仏の本懐を失ひて、爾前得道の者のためには法華経無用なりと云へる事
を、能能慎むべし、恐るべし。古の徳一大師と云ひし人、此義を人にも教へ我心にも存じ
て、さて法華経を読み給ひしを、伝教大師此人を破し給ふ言に「法華経を讚すと雖も還つて
法華の心を殺す」と責め給ひしかば、徳一大師は舌八にさけて失せ給ひき。

【語句の意味】

文の心は〓お経文の意味は。

四十余年の程〓四十数年の間。

若干の〓かなり沢山の。いくつかの。

聴聞せしかども〓聞いたけれども。

やうなる法をば〓その様な教えを。

すべてきかず〓少しも聞いたことが無い。

四十二年のき、(聴)と〓四十二年間(方便の教

えを)聞いたこと。

今経のき、とをば〓今法華経を聞いたことを。

わけ(分)たくらぶ(比)べからず〓分けて比べ

てはいけない。

得道の人のためにして〓仏道を修行して悟りを開

く人のためであつて。

爾前得道の者〓法華経が説かれる以前に悟りを開

いた者。

をのずから〓自ずからもっているまま。自然に。

一機〓一類の機縁。仏から同一の教えを受ける

べき能力の人々。

一縁〓多縁の中の一縁。個人の能力に合わせて

説かれた仮の縁。

しつらう(造)ところ〓設けたところの。作った

ところの。

方便なれば〓仮の教えであるから。

設ひ〓仮に。

有縁無縁の沙汰〓仏の教えに縁の有る者、無い者

の定め。

爾前の経経の座にして〓法華経以前の多くの教

えを聞いて。座〓座席〓聴聞。

得益しつる機ども〓悟りを得た能力(機)の人々。

押ふさね(聚束)て〓強いて取り纏めて。

一純に調へて〓雑じりけの無い状態にして。

説き給ひし間〓説かれたのであるから。

あるべからざるなり〓有りはしないのである。

悲しい哉〓悲しい事だなあ。

大小、権実〓大乘仏教・小乘仏教、権教・実教。



みだりがはしく||入り乱れた様で。

仏の本懐ほんかいを失うしなひ||お釈迦様の本来の願

いを失い。

恐おそるべし||恐れなさい。恐ろしい事で

ある。

徳一大師||平安時代の法相宗の学僧

(元 奈良 東大寺に住す)。

『仏性抄』等を著あわし

「仏性抄」等を著わし「法華一
仏乗」を批判したため日本天台

宗の祖 伝教大師最澄さいちよう(比叡山

延暦寺を開く)と論争が続い

た。

此義このぎを人にも教へ||誤った考え(此義)

を人に教えた。

我心わがこころにも存じて||自分でも信じて。

破はし給ことばふ言||論破されたことば。

「法華経を讚さんすと雖も還かえつて法華の心を

殺ころす」||法華経を讚嘆しているけれ

ども、反つて法華經の精神を失つている。
失せ給ひきゝ死んでしまった。

【現代語にしてみる】

これらの お経文の意味は『四十数年の間、かなり
沢山の説法を聞いたけれども、法華經の様に勝れ
た教えは一度も聞いたことが無い。お釈迦様は、
今まで説かれなかつた』と法華經を褒めた文章で
す。四十二年間にわたつて聴聞した方便の教えと、
今聞いた法華經の教えとは、違い過ぎて比べる
対象にもなりません。それなのに「法華經は、法
華經で成仏する人のためのお経であり、法華經が
説かれる以前に成仏した者にとっては無用である」
などと言うのは大きな誤りです。
もともと四十二年間、説かれた教えは「お釈迦様
から同一の教えを受けるべき能力の人々や凡夫一
人の能力に合わせて説かれた方便」として語られ
た仮の教えですから、自然と「諸々の教えに縁の
有る者、縁の無い者の違い」があつたけれども、

法華經は、法華以前の教え（爾前のお経）で成仏
した人も、成仏していない人も、総て纏めて同一
の能力に整えてから、それまで以上の教えを説か
れたのですから「爾前の教えとは有縁で法華經と
は無縁だ」などと言うことは無いのです。

悲しいことに大乘仏教・小乗仏教、権教・実教が
入り乱れて、お釈迦様の本来の願いが失われ「爾
前の教えで成仏した者に法華經は無用」と言うよ
うなことは、よくよく慎み恐れるべきです。

平安時代の法相宗の学僧 徳一大師は「爾前の教え
で成仏した者に法華經は無用である」と人々に教
え自らも信じて、法華經を誤つて解釈しました。

その徳一を論破するために伝教大師が「法華經
は、大變ありがたいお経であると褒めているよう
だが、実際には法華經の素晴らしい精神を殺して
いる」と責められたところ、徳一は舌が八つに裂
けて死んだと伝えられています。

— 続く —